

蘆花師の造り亀戸水神祠畔に結ひ吟稿を郊外の凡物に煙にせん
 十^十塵幸龍衣集して半日の閑を得ることもな^な適々田圃の春秋を
 訪はんとするも或は以雨に妨けられし心なく散る花を専^専
 りにば秋のぬれに嘯きて、胸襟をうららぐを得ず碌々致々
 して酸面白髪の数も重^重のこりづれの日か快弁なまりなを違^違
 得んと老のなまゆるまに^{まに}た^たに童子座にありて先ひて曰く
 卿の吟言は吾れ吾意を得る事なり^{事なり}畢竟^{畢竟}卿のこころせば執
 此のりか閑の心を得^得ハせん吾れ閑く世有るものは有るに苦^苦み
 無^無きに苦^苦む者無の二つに耽著して閑境をたづむに於て環のほ
 一^一たのまにひと^{ひと}く吾れに吾の得ならん^{得ならん}あ^あ一^一夫れ有無の境分を
 去りて我えぢんは花に對して花月に對して^{花月に對して}あ^あの^のあ^あの^の
 閑境を採^採は右に縁りて魚を求^求るにあ^あなり^{なり}からんと市大に
 行^行ききて童子に問て曰く汝何人にか斯る^{斯る}と真理を閑くやと
 童子曰く吾れ何人にも閑た^{閑た}事なり^{事なり}唯^唯卿の著書の一節を
 讀みて試^試に卿に答^答ふもの^{もの}雖然^{雖然}吾れは其義理を了解せんに
 此の^{此の}の^の此^此の^の卿の讀た^{讀た}書を服膺せざるを笑ふものと予
 以^以て放^放て暗然たるも久^久くして彼の三つ子に汝の古語を
 思ひ又には記を作る

黄昏や

梅名ひたす

月半輪

三品樓殿